

ULESI
ASSOCIATION 1901 à but non lucratif
Développement personnel, professionnel, organisationnel
N° national de formation continue 11 921105992
N° Siret 324 081 827 00036 Ape 804D
Chez Marie-Thérèse BAL-CRAQUIN
7 Avenue Marcel Martinie
92170 VANVES • Tél : 09 50 90 95 14
info@ulesi.fr
<http://www.marie-therese-bal-craquin.fr>

多代的・システム論的・現象学的療法が、
個人と集団の健康の発達に貢献できるもの

マリー＝テレーズ・バル＝クラカン

2009年6月7日
第4回SIDIEF国際学会
— 2009年6月7日～11日、於マラケシュ—
における講演録

私たちの反応、身体的または精神的疾患、行動といったもののなかには、先祖から継承されたものがあるということが、ここ30年で、明らかになってきました。このような反応の中でも、とくに健康に関する問題は、看護特有の専門分野にかかわっています⁽¹⁾。

この、世代を超えて受け継がれるものにアプローチするとき、可能となる2つの主なる手法が、心理系譜学⁽²⁾とコンステレーションです⁽³⁾。

まず、コンステレーションよりはるかによく知られている心理系譜学⁽⁴⁾については、触れるだけにとどめます。

「コンステレーション（星座のような全体的布置）」というこの詩的な名称は、宇宙の中の生命というもの、そのそれぞれの形態は、星と同じように、それぞれ唯一の場所を占めている、ということを強調しているのです⁽⁵⁾！そして、もし宇宙の中で、ある一つの星が自らの居場所にいない場合、それは「破綻（*désastre*）」を形成することになります。

Dés（分離、反対などの意）—*astre*（天体、星）、まさに言葉そのものの語るところです。ひとつの「生命の形態」、胎児から老人までの人間も含まれるわけですが、この形態が、家族や集団など、あるシステムの中で、自らの位置を占めていないとき、「破綻」が形成されるのです。

この「コンステレーション」とよばれる、システムに対する作用形態⁽⁶⁾は、学術用語では、「家族内または企業内における再配置に対する現象学的かつシステム論的なアプローチ」⁽⁷⁾とよばれます。

この2つの方法のいずれも、その目的は、人々やシステムを、それぞれの生態系を尊重しながら、その自主性を失わせている絆、関係から解放し、自由な絆が構築できるようにすることなのです。

心理系譜学が、特に論理や、事実の探求、人の認識面に訴えるのに対し、コンステレーションは、個人または集団の、人間の無意識という未知の領域に、その視点を開いています⁽⁸⁾。

コンステレーションは、古代から伝わる手法です。太古の時代では、誰かが、ある絆の問題、計画の欠如、または他人との支障ある関係といった問題性を提示した場合、長老たちがボランティアを招集し、そのグループで一つの円「知の場」をつくらせ、その円の内側に、問題の要素を、人物あるいはシンボルを使って配置させました。そして、その「代理

人」たちを感じるままに振るまわせたのです。もしこのときに、代理人たちがどう動いたか、なにを感じたかということが、問題性を表現していたなら、その後、その問題は自然に解決される、ということ、彼らは知っていたのです。プロセスが癒しをもたらす。それは現代でも同様です。

1970年代にこのアプローチを再発見したのは、ヴァージニア・サティア⁽⁹⁾でした。サティアは、システム論的家族療法の第一人者で、そのセラピーの一貫として、このアプローチを用いたのです⁽¹⁰⁾。サティアはカリフォルニアに住んでいましたが、ここでは当時、先住民たちの伝統が、再注目され始めていました。カリフォルニアは、伝説で「Angelo」とよばれていたアメリカ先住民の土地で、そこから、ロサンジェルス⁽¹¹⁾の街の名前がつけられた、というのですが、これについては、キリスト教の伝道師を由来とする説の方が、より確かと言えるでしょう。

それから後、コンステレーションの研究は、ドイツ人神父、バート・ヘリンガー⁽¹¹⁾によって組織化されました。ヘリンガー自身、キリスト教の宣教師であり、南アフリカの学校の責任者でもありました。彼は、アフリカ人たちの癒しの手法に影響を受けていましたが、これは、カリフォルニアで再発見された手法に、奇妙なほど似通っていました。

現在、コンステレーションの思潮には、三つの大きな傾向があります。一つは、システム論につながるもの⁽¹²⁾、二つ目は、現象学派につながるもの⁽¹³⁾、そして、二つの学派両方につながるもので、私自身は、どちらかといえば、この三つ目の学派に属しています。

コンステレーションは、過去の問題に焦点を当てるばかりではありません。むしろ、そこからかなりかけ離れているといえます。コンステレーションの本質的な目的は、「喪失 aliénation = a (否定、欠如の意) - liénation → lien (絆)」したり、関係が断絶されたり、または構造的に機能不全に陥ってしまった、家族や共同体、企業といったシステムを助けることなのです⁽¹⁴⁾。

もし現在の、または多世代にわたった問題性が、私たちの生活に困難をもたらし、病気で引き起こすことになるとしたら、一体なにが、一つのシステム、そしてシステムの中の一人を、病気にしうるのでしょ

- 1/排除
- 2/呪い
- 3/交換における不均衡
- 4/錯綜
- 5/生命の法則に対する非尊重
- 6/無秩序
- 7/愛着システムの支障
- 8/不幸を招くパラダイム (ものの見方)

1/排除
系図を分析する際に必ず確認されることのひとつは、排除されたすべてのもの(言語、国、宗教、イデオロジー、芸術的あるいは知的天性、人物、子どもなど)は、二、三代あとに再び浮かび上がってくるよう定められている、ということです。これはとりわけ、秘密に関わる問題性について言えます⁽¹⁵⁾。死別の悲しみ、タブーに由来する問題、近親相姦、正式な結婚によらない出生、不貞、自殺、殺人、司法による有罪判決、精神疾患、結核などの病気、アルコール中毒など、こうした問題性には、排除の可能性が多く含まれています。認知、発言、辞令や任命によって関連づけられなかったものすべては、「幽霊」⁽¹⁶⁾「形のない混乱」として、家族や企業というシステムの中を、そのままさまよい続ける危険性があるのです。

排除に対する療法は、たとえ象徴的な形であっても、排除されたものを回復することです。

2/呪い
自分自身、あるいはだれかを「mal dire (悪く 言う)」ことは、短期間内に、自らの、あるいは子孫のだれかの体に、「mal à dit → maladie (病気)」⁽¹⁷⁾を引き起こします。

「私がお前のお父さんと結婚してしまったのは、お前のせいなんだ」、「お前が生まれてさえ来なかったら、私は仕事で成功していたのに」、「お前のお父さんが出て行ったのは、お前のせいなんだ」、「お前はおじさんそっくりだよ。おじさんのように施設でくたばることだろうよ」、「それに大体、お前なんか、望んでできた子じゃないんだ」、または別の言い方、「(お前ができたのは) アクシデントだった」(一人の子どもを授かるということは、絶対にアクシデントではあり得ないのです。神秘的なのです。生命は、その両親をその子どもの親にならしめるがために選ぶのです)。または、事故、あるいは子どもが死んでしまったとき、「お前だったらよかったのに」と言う場合。人は、こうしたすべての恨みごとや呪いを、だれかに投げかけたり、または感じさせたりして「maudit (呪う、恨む) → mot dit (発つされた言葉)」のです。

愛着や別離の問題の中には、多くの場合、呪い、恨みが見受けられます。離婚のケースを思い起こせば十分でしょう！ 子どもに父親か母親のことをあまりに悪く言うがために、子どもは、その「呪われた」親から受け継いだ自分の一部を、絶対的な悪としてしかみなせなくなってしまう、というように、呪いは微妙な形態をとります。そして、この呪いの形態は、死をもたらす(18)、コンステレーションが導きうる最たるものは、呪いを祝福に移行させることなのです。「bénédictio (祝福)」、「bien (よい) dire (言う)」、相手のことをよく言う。リュック・ビジェ(19)が提言しているように、「MAL (悪) から LAM → l'âme (魂) の希望へ。フランス語圏の会議に参加しているからには、言葉遊びで楽しもうではありませんか」。

呪い、恨みに対する療法は、それらを祝福に変えること(20)……ここでもまた、喪失に対する遺恨の念を表現できたかどうか、鍵となります。

3/ 交換における不均衡

交換における不均衡は、家族または企業といったシステムの中で、困難を生み出す原因のひとつです。

例えば、賃金を支払わずに働かせる、あるいは搾取する、奴隷売買で大金を手に入れる(21)、略奪で利益を得る(22)。また家族においては、一人の子どもが、他の子どもを育てるために犠牲になる。相続の際、ある子どもが、他の子どもの不利益を犠牲にして特権を受ける(相続人が最も困難をかかえる危険性があります)。一人が名誉を受け、もう一人は名誉を傷つけられる。夫婦間では、一人が外で働き、もう一人は外で働かないが、家庭内でしていることが価値あるものとして認められない。また、一人は多くの学位を持ち、もう一人はひとつも持たない。

南半球に対する北半球の豊かさの不均衡は、交換におけるマクロな不均衡と言えます。そして、それが生み出すドラマは、私たちのよく知るところです。

交換における不均衡に対する療法は、均衡を回復させることですが、重大なダメージがあった場合、実行すべき「修復」は難しくなってくるので、しばしばデリケートな問題です。相続や財産分与のときに出てくる問題を考えてみればよいでしょう。しかし、これが、後の世代に重くのしかかる負債から逃れるために、家族システムが支払わなくてはならない価なのです(23)。経済界全体についても同様です。

4/ 錯綜

錯綜は、多くの場合、これまでに出来た問題の結果としておこるもので、ある人物が他のだれかと同一視されるときに状況をいいます。先祖、死んでしまった子ども、加害者、被害者、失踪者、事故にあった人、事故を引き起こした人、英雄、精神病患者、死んでしまった双子の片割れ、など。

ここでわかるように、錯綜は、だれかの認知されない死去、すなわち、不可能な喪に、起因していることがあります。そのような場合、錯綜した人物は、まるで、その相手に起こったことを体験したり、その呪いや排除、不名誉、非認知をつかさどったものを代表することを、自らに課しているかのように、自身にとっても周りの人々にとっても奇妙な行動をとるのです。

多重人格とよばれるものは、ここから来ている場合があります。分裂病(一人あるいは複数の殺人者との錯綜)、躁鬱病(一人あるいは複数の被害者と加害者の間での錯綜)、抑鬱症(亡くなってしまった双子の片割れ(24)、さらには亡くなった胎児との錯綜)など、重度の精神疾患の陰には、錯綜を見受けることができます。コンステレーションのワークは、こうした状況に働きかけることのできる数少ない手法のひとつです。

錯綜に対する療法は、錯綜している人物を見つけ出すこと、そして、愛するが故に、その人物の代わりに負わなければならないと信じていたもの、そして、実際にはその必要のないものを、代理人という間接的な手段を使って、その人物に返すことです。

5/人生の法則に対する非尊重

人生が展開していくためには、ある程度の法則が必要です。例えば、物理学的、あるいは、生物学的な法則、また、倫理的、道徳的な法則もあります。私たちは、これらすべての法則を知っているわけではありませんが、先祖の人々が残してくれた文化遺産から、それらにアプローチすることができます。物理学、生物学などに由来する法則とならぶ、人生の法則の基本とは、「自分にしてほしくないことを、他人にしてはいけない」ということです。

これらの法則のひとつが尊重されない場合、私たちは罰を受けるのではなく⁽²⁵⁾、非尊重の結果というものを被るのです。例えば、もしだれかが塔の8階から飛び降りれば、その人は死にますが、彼は「罰」を受けたのではないのです。重力という人生の法則のひとつを尊重しなかった、その結果を被ったのです。もちろん、本人には、その法則を尊重しなかった理由があるかもしれませんが！もしだれかが、たとえ彼に責任がなかったとしても、自動車事故で人を殺してしまったとしたら、彼は罰を受けるのではないのです。しかし、結果を被るのです。そして、それらの結果とは、そのとき以降、彼の家族と、殺された相手の家族との間に、運命という関係が存在する、ということなのです。彼が故意に殺したにせよ、そうでないにせよ、彼自身を危険にさらし、そして、彼の家族をも数世代にわたって結果の影響下にさらすことになるといえるのです。

多世代にわたるワークは、厳密に言えば、道徳的な再整理の仕事ではなく、彼自身、あるいは、子ども、孫、ひ孫といった彼の子孫たちが苦しむ必要のないように、彼の行為の結果を、できる限り受けとめられるようにするためのアプローチなのです⁽²⁶⁾。もう少しあとで、私たちがどのように祖先から継承するのか、詳しくお話ししたいと思います。

人生の法則に対する非尊重のための療法は、結果が系譜の中で呪いとならないように、それらを認知し、受け入れ、さらには修復することです。

6/無秩序

家族や企業といったシステムは、ある秩序を有しています。例えば、兄姉は弟妹の先に生まれる。男性は女性の右、子どもたちは女性の左……。無秩序は、だれかが自らの居場所にいないときに、生じてくるのです。

例えば、両親が離婚した後、長女が母親に対する念から、父親のポジションを占めなければならないと思っているケース。これは、女性の同性愛の原因のひとつであり、セクシャリティの観点から見れば、絶望的な状況です。

また、一人の思春期の少女を例にとりましょう。彼女は、兄妹の中での彼女のポジションに深くつながっていた中絶について、両親がコンステレーションを行う日まで、拒食症、多食症に苦しみました。

さらなる例としては、ある夫婦が中絶を経験した後、その妻は別の男性と一緒にになり、3人の子どもをもうけました。この「3人目」の子どもは、無意識のうちに、母親にとって4人目となる自分のポジションにつながっている、先に中絶で死んだ一人目のポジションを占めなければならないと考えるのです（後述の“兄弟姉妹の順位”を参照）。彼は、ゴシック風に着飾り、自傷行為を繰り返します。彼は、加害者でないばかりか、他者の被害者なのですが、もし、自分の異父兄姉を「殺した」人物—つまり母親の前夫と母親—を自分に同一視した場合、彼は、暴力的になり、破壊者、のみならず殺人者にもなりうるのです。コンステレーションは、これほどまで深刻になりうる、こうした行き止まりの状況、精神病院や刑務所、または浮浪者のように路上に、人々の「位置を変えて」しまう八方塞がりの状況から抜け出す手だてとなるのです。

システムの再構成や再現は、秩序を修復し、緊張状態を緩和し、さらには、無秩序によってもたらされた病的疾患を治癒することを可能にします。

7/愛着システムの支障⁽²⁷⁾

要約して言うならば、「愛着とは、すべての生物が生きていく上で不可欠な、他者との近親関係を作る必要性」のことです。この近親関係は、まず、身体的であり、そして、人間においては、象徴的になります。

愛着システムには、4つの大きな基本的段階があります。コンタクト（接触）、関係の維持、分化、そして喪です。もしあまりに重大な断絶がいずれかの段階上であった場合、その人物のショックは、個人的そして多代的な問題性に発展しかねません。そしてそれは、コンステレーションで明らかにすることのできる問題なのです。

例えば、第一次大戦で夫を亡くした悲しみから二度と立ち直れなかった女性。その4世代後に、彼女のひ孫である女性は、家庭を築くことができないのです。男性と関係を築き始めるその度に、彼女は、まるで、よそに追い払うかのように、その男性を捨てるのです。彼女のコンステレーションは、彼女が自分のためではなく、曾祖母のために夫を探しているということを示すでしょう。

また別の例では、ある男性が、自分を殺そうとしているだれかに、汽車の下に押し込まれるように感じました。周りの人たちが、間一髪のところまで彼を捉まえましたが、実際には、彼のことを押した人はだれもいないのです。この男性の母親は、妊娠3ヶ月のときに、双子だった彼の片割れを亡くしていました(28)。男性は、この亡くなった子どもと自分を区別することができなかつたのです。そして当然なこと

に、自分の感情をだれかに語る術も、死別の悲しみを経る術も持っていませんでした。その上、彼は、母親が子どもを亡くした悲しみをひきずっている、その中で生まれて来たのです。そのことが、母親とのコンタクトに混乱をもたらし、死んだ子どもは、彼をおびやかす幽霊のようになりました。コンステレーションをすることで、亡くなった子どもに名前をつけ、家族の系譜に加えられ、祖先の文化の中で祝福を与えた結果、生き残った双子の一方を脅かしていた症候群は消えました。このケースは、精神科医によって我々に委ねられたものでした。

コンステレーションは、人々を、心理的外傷をもたらした出来事に結びつけ、それから解放することを可能にします。

8/不幸を招くパラダイム

これは、最悪の状況を導くことしかできない、ものの見方のことです。戯画化して言うると、「私の過去はひどいものだった。だから、私の現在も悪いことしかあり得ないし、私の将来だってもっとひどいに違いない」と考える人。こうした人々は、不幸という芸術においては専門家(29)になり得ても、人生をひとつの幸福として迎え入れることは、難しいでしょう(30)。

同様に、他者が自分にもたらした悪が、自分の苦悩やストレスといった状況の原因だと信じている人たち。他者があなたにもたらした悪、災いではなく、あなたがそれに対してどうしたか、ということが、あなた自身の不幸を引き起こす決定要素となるのです(31)。

不幸を招くものの見方については、そうした見方が正しいと信じている、信じるしかしよのない人々と、慎重にワークをすすめていかななくてはなりません。

ここで疑問が生じてきます：私たちはどのように祖先から「継承」するのでしょうか。

まず初めに確認できることは、私たちは、一世代飛び超えて、祖先から継承するということです。あなた方の子どもたちは、あなた方自身からよりも、あなた方の親たちから受け継ぐのです。祖父母が心理的外傷を受け、それを「消化」（「生成」ともいえます）できなかった場合、親の代では、そのトラウマが「心理化」、つまり心理的問題として現れ、子どもの代では、より深刻な、かつ、心理療法といった治療によりアクセスしやすいトラブルの形で、身体化するのです(32)。それは、免れられないものではなく、それぞれの世代が、それぞれに受け入れるべき発展、とくに、変換(33)という課題を負っているのです。

例としては、祖父母、さらには祖父母の両親に対して怒りを抱いている子どもをしばしば見受けられます。これは、肝臓障害(34)や、説明不可能なアレルギー症状、さらには糖尿病（二人の祖母間の衝突）となって現れることがあります。多発性硬化症は、男性の系譜の中での「死闘」につながっていることがあります。拒食症のなかには、1789年のフランス革命まで遡った虐殺に重なるものもあるのです！ 不妊は、死の危険に冒された生命の停止反応(35)であることがしばしばあります。躁鬱病と分裂症については、すでに言及した通りです。

また、兄弟姉妹の順位に関連して、祖先から受け継ぐこともあります。すべての受胎（流産、中絶、体外受精の失敗、子宮外妊娠）が、それぞれの居場所を持ち得ると考えられる

からです。代理母のケースのように、兄弟姉妹の順位に「穴」をあけてしまうことの不条理さ！ また、「胎児減数手術」のような決断の深刻さを考えてみてください。

1	2	3
4	5	6
7	8	9

第一子は、父親の系譜の中に位置します。長男あるいは長女の死は、自らの系譜の中でダメージを受ける父親にとっての方が、母親にとってよりも、「より深い」傷となります。第一子は、家の基礎、土台を象徴し、両親よりも祖父母とより深い関係をもっています。

第二子は、母親の系譜に位置します。第二子の死は、自らの系譜の中でダメージを受ける母親にとっての方が、父親よりも「より重大な」傷となります。第二子は、家の壁（第一子が“深さ”の子どもであるのに対し、第二子は“内部”の子どもです）を象徴します。また、第二子は、両親とのつながりが深く、両親の離婚の際には、他の兄弟たちよりも深い苦しみを味わうことがあります。

第三子は、変化の子どもです。なにか「違う」ことをしなければならないのです。第三子は、家の屋根、完成、防備、さらには改築を象徴し、兄弟姉妹との関係にあります。第三子の死は、人生における有用な変化が不可能であることを示し、兄弟姉妹にとって「より重大な」苦悩となります。

第四子は、第一子の系譜、つまり父親の系譜に連なります。

第五子は、第二子の系譜、つまり母親の系譜に連なります。

第六子は、第三子の系譜、つまり変化の子ども、など。

この図式は、ひとつの可能な解釈地図として扱われるべきものであって、人々を閉じ込める方式ではありません。いくつかの反応を理解する助けになったり、世代を超えた継承というものを、より早く識別することを可能にするのです。

多代的継承に関する第三の恒常性とは、私たちは、自分の家族の反映である家族をもった人物と結婚する⁽³⁶⁾、ということ、一種のミラー効果です。これは重要なポイントであり、システムを解放する希望を与えるものなのです。

これらすべての例を読めば、確証としてみなされうるものは、何に根拠をおいているのか、という疑問が出てきますが、これらは、結果によって妥当性を検証された研究の仮説にすぎないのです。本質的には、結果なのだ、ということです。多分系譜の中のこれこれといった問題に関することである、という推論は、結果から引き出された確証なのです。というのも、状況を表現することは、人々やシステムに、回復すること、そしてより楽になること、足かせになるものから解放されたと感じることを可能にするからです。

結論として、もし健康問題、特に病気に関して、心理学的アプローチにとどまってはならない⁽³⁷⁾のだとしたら、コンステレーションの仕事は、少なくとも、挫折のシナリオから抜け出すチャンス、人生に目覚めるチャンスをもたらします。また、子どもたちが祖父母の問題を、そして、孫たちが私たちの問題を抱えこんでしまうことを避けるチャンスも与えてくれるのです。

注 :

- (1) BAL-CRAQUIN, Marie-Thérèse "*Comment et pourquoi initier une démarche éducative ? Conférence du 3 juillet 2003 aux élèves Infirmier(ère)s de Bar-Le-Duc*".
http://www.infiressources.ca/fer/depotdocuments/La_demarche_educative.pdfにてアクセス可能。
- (2) ANCELIN SCHÜTZENBERGER, Anne "*Aïe, mes aïeux !*" Éditions La Méridienne/Desclée de Brouwer, Paris, 2000, 254 pages.
- (3) MANNÉ, Joy "*Les constellations familiales : Intégrer la sagesse des constellations familiales dans sa vie quotidienne*" Éditions Jouvence, France, 2005, 95 pages.
(原題 « Family Constellations » North Atlantic Books, Berkley, CA, 2004)
- (4) PHANEUF, Margot "*Communication, entretien, relation d'aide et validation*" Éditions Chenelière/McGraw-Hill, Montréal, 2002, 634 pages.
本書の中で、著者は、心理系譜学の「道具」ジェノグラムの実践的な使い方について、とてもよい指示を与えている。(P. 513～)
- (5) REEVES, Hubert "*Poussières d'étoiles*" Éditions Seuil, Collection Points Sciences, Paris, 1988, 252 pages.
- (6) GRÜN, Anselm "*Management et accompagnement spirituel*" Éditions Desclée de Brouwer, Paris, 2008, 270 pages.
本書第5章で、高名なベネディクト会修道士である著者は、システミック・コンステレーションの手法と、「健康」の発達と企業内での関係の治癒におけるその有用性を説明していて、私たちに、医療現場における健全な実践とは何かということを示唆してくれる。(P. 181～)
- (7) HELLINGER, Bert ; TEN HÖVEL, Gabrielle "*Constellations familiales*" Éditions Le Souffle D'Or, France, 2001, 210 pages.
- (8) GROF, Stanislav "*Royaumes de l'inconscient humain*" Éditions Le Rocher, Collection L'esprit et la matière, 1992, 288 pages.
(原題 « Realms Of The Human Unconscious » Souvenir Presse, 1996)
- (9) SATIR, Virginia "*Pour retrouver l'harmonie familiale*" Éditions Universitaires, Paris, 1980, 306 pages.
(原題 « Peoplemaking » Souvenir Presse Ltd., 1978)
- (10) SATIR, Virginia "*Thérapie du couple et de la famille*" Éditions Desclée de Brouwer, Paris, 1995, 251 pages.
(原題 « Conjoint Family Therapy » Science and Behavior Books, 1983)
- (11) HELLINGER, Bert "*La maturité dans les relations humaines*" Éditions Le Souffle D'Or, France, 2002, 231 pages.
- (12) POTSCHKA-LANG, Constanze "*Constellations familiales : guérir le transgénérationnel*" Éditions Souffle D'Or, Collection Chrysalide, France, 2001, 283 pages.
- (13) SINGER, Christiane "*Éloge du mariage, de l'engagement et autres folies*" Éditions Albin Michel, Paris, 2000, 132 pages.
- (14) WEBER, Gunthard ; HELLINGER, Bert "*Les liens qui libèrent*" Éditions Grancher, 1998, 321 pages.
- (15) NACHIN, Claude "*À l'aide, y a un secret dans le placard !*" Éditions Fleurus, Paris, 1999, 200 pages.
- (16) DUMAS, Didier « *L'Ange et le Fantôme: Introduction à la clinique de l'impensé généalogique* » Éditions de Minuit, Collection Arguments, France, 1985, 179 pages.
- (17) BIGÉ, Luc « *Petit dictionnaire en langue des Oiseaux : Prénoms, Pathologies et Quelques Autres* » Éditions de Janus, Collection Systèmes du Monde, France, 2006, 240 pages.
- (18) VAILLANT, Maryse "*Il m'a tuée*" Éditions de La Martinière, Paris, 2002, 284 pages.
- (19) BIGÉ, Luc "*Petit dictionnaire en langue des Oiseaux : Prénoms, Pathologies et Quelques Autres*" Éditions de Janus, Collection Systèmes du Monde, France, 2006, 240 pages.
- (20) GRÜN, Anselm "*Vous êtes une bénédiction ?*" Éditions Salvator, France, 2006, 157 pages.

- (21) PÉTRÉ-GRENOUILLEAU, Olivier "*L'argent de la traite : Milieu négrier, capitalisme et développement : un modèle*" Éditions Aubier, France, 2009, 418 pages.
- (22) ROSNAY, Tatiana de "*Elle s'appelait Sarah*" Éditions LGF, Collection Littérature étrangère, France, 2008, 403 pages.
(タチアナ・ド・ロネ「サラの鍵」新潮クレストブック、2010)
- (23) CANAULT, Nina "*Comment paye-t-on les fautes de ses ancêtres : L'inconscient transgénérationnel*" Éditions Desclée de Brouwer, Paris, 2007, 167 pages.
- (24) AUSTERMANN, Alfred Ramoda "*Le syndrome du jumeau perdu*" Éditions Le Souffle d'Or, Collection Constellations Familiales, France, 2007, 292 pages.
- (25) GRÜN, Anselm "*Qu'est-ce que j'ai fait pour mériter ça ?*" Éditions Desclée de Brouwer, Paris, 2006, 191 pages.
- (26) RIALLAND, Chantal "*Cette famille qui vit en nous*" Guide pratique de psychogénéalogie, Collection Marabout, Éditions Robert Laffont, Paris, 1994, 250 pages.
- (27) BAL-CRAQUIN, Marie-Thérèse "*Attachement, séparations, deuils, dépressions : ouvertures transgénérationnelles. Conférence du vendredi 5 octobre 2007 à Déols*". http://www.infiressources.ca/fer/depotdocuments/ConfDeuil_M-T_BalCraquin_oct2007pdf.pdf にてアクセス可能。
- (28) AUSTERMANN, Alfred Ramoda "*Le syndrome du jumeau perdu*" Éditions Le Souffle d'Or, Collection Constellations Familiales, France, 2007, 292 pages.
- (29) WATZLAWICK, Paul "*Faites vous-même votre malheur*" Éditions du Seuil, Collection Seuil Humour, France, 1990, 119 pages.
(原題 « The situation is hopeless but not serious – The pursuit of unhappiness » W. W. Norton&Company, 1983)
- (30) FILLIOZAT, Isabelle "*L'alchimie du bonheur*" Éditions Dervy, France 1992, 300 pages.
- (31) PRADERVAND, Pierre "*Plus jamais victime : victime ou responsable, je choisis*" Éditions Jouvence, Genève, 2001, 96 pages.
- (32) ANCELIN SCHÜTZENBERGER, Anne ; DEVROEDE, Ghislain "*Ces enfants malades de leurs parents*" Éditions Payot et Rivages, Paris, 2004, 179 pages.
- (33) SINGER, Christiane "*Du bon usage des crises*" Collection Espaces Libres, Éditions Albin Michel, Paris, 2005, 147 pages.
- (34) SELLAM, Salomon "*Origines et prévention des maladies*" Éditions Quintessence, France, 2003, 350 pages.
- (35) MILLER, Alice "*Notre corps ne ment jamais*" Éditions Flammarion, Paris, 2004, 192 pages.
- (36) CYRULNIK, Boris "*Les nourritures affectives*" Éditions Odile Jacob, Paris, 2000, 252 pages.
- (37) SONTAG, Susan "*La maladie comme métaphore*" Éditions Christian Bourgeois, France, 2005, 111 pages.
(スーザン・ソntag「隠喩としての病い・エイズとその隠喩」みすず書房、2006)



マリー=テレーズ・バル=クラカンは、臨床専門看護師で、神経言語プログラミング（NLP）の指導も行う。精神分析学、分析弛緩法、交流分析学、ゲシュタルト心理療法、システム論的家族療法、トランスパーソナル心理学、理性感情療法（RET）、システム論的・多世代的・現象学的療法の研修を受け、ヨーロッパ各国で、10年以上にわたり、家族内・企業内再配置のセミナーを行っている。

「Infirmières Spécialistes Cliniques en France フランス臨床専門看護師」の主要創業者であり、その団体である「Société Française des Infirmières

Cliniciennes Spécialistes Cliniques et Cliniciennes Consultantes (SIDIEF) フランス臨床専門看護師・臨床医協会」の会長も務める。また、バージニア・ヘンダーソンが名誉会長を務めていた「l'Université Libre Européenne en Sciences

Infirmières ヨーロッパ看護科学自由大学」の創立者のひとりとして、四半世紀にわたって理事を務め、フランスのために、世界中の看護科学界から優れた専門家を招聘してきた。

16人以上の要請があれば、どこへでも赴き、コンステレーションをおこなう。

問い合わせ

Marie-Thérèse BAL-CRAQUIN

7, avenue Marcel Martinié

92170 VANVES

Tel : +33 (0) 9 50 90 95 14

info@ulesi.fr

<http://www.marie-therese-bal-craquin.fr>

できればメールでお問い合わせください。

レジュメ (1)

私たちの人生は、気づかないところで、私たち自身によるものではない感情や行動の影響を受けている。というのも、私たちは、過去に由来する秘密や劇的な事件、無自覚な忠誠によって、家族システムにつながれているからである。このことは、深刻な混乱をもたらしながら、現在に反映してくる。紛争、重病、麻薬中毒、事故、自殺、不妊、離婚、職業上の断絶、おちこぼれなどは、非常に多くの場合、数世代から連なって、また、数世代同時に繰り返され、そして増殖する。この連鎖から抜け出し、「ファミリー・ルーツ」を癒し、祖先と和解するためには、さまざまなアプローチが可能であるが、この講演では、これらの手法についてとりあげていく。

多代的・システムの・現象学的療法の利点と、健康の発達における貢献を、聴講者に理解しやすく、そして有用に解説するために、多代的な見方を考慮に入れることが、いかに健康の回復と発展にとって決定要素となりうるか、生物学的、心理学的、社会的、精神的、そして環境的な次元での健康問題に関する具体例をあげながら、明らかにしていく。可能な対処法、グループセラピーから得られた結果も提示する。

「病気」をもたらす要因や、家族、共同体、企業といったシステムを「治癒する」ための働きかけについても考察していくとともに、健康回復へつなげていくケアの手順も提案する。同様に、それらの手法をどのようにマスターするか、また、結果についてどのように評価するかに関しても、とりあげていく。

講演は、発表形式と質疑応答で構成され、講演テキストは入手可能である。

レジュメ (2)

家族内、企業内の再配置における、システム論的・現象学的・多代的療法は、どのようにして、個人そして集団の健康の発達に貢献しうるのだろうか。何がシステムを病気にし、何が治癒をもたらすのか？ どのように進め、手法をマスターし、評価するのか？ 以上が、この講演によって論じられるテーマとなる。